

船橋晴雄（シリウスインスティテュート代表取締役社長）様のお話を要約に纏めました。

「皆さんは数学の研究者として、大学や研究機関で活躍していらっしゃるわけですが、私は学問や研究ばかりでは無く、どんな仕事にも共通して意識をすべきことが三つあると思っています。

一つ目は仕事の「遊戯性」と呼ぶべきもので、これは仕事そのもの楽しさ、「遊戯性」があり、どんな仕事でも楽しまなければ良い結果は得られないということです。一方、仕事であるからして、楽しいことばかりと言うわけにはいきません。この「遊戯性」の対比に位置するものが「実用性」です。楽しんでばかりいてはこの「実質性」が見逃されてしまい、現実離れした研究になってしまいます。

二つ目は「聖性」で、すべての仕事は尊く神聖な目的を持つ、ということです。皆さんの分野である数学はこの点、際立って「聖」（ピュア）であると言えます。すべてがロジックで説明でき、あいまいさのない美しい世界です。しかしそこにも対比する世界があります。数学的ロジックでは説明できない、人間の持つ感性、例えばカンや美意識などで、ここでは「俗性」と呼びます。この感性の存在を意識できなければ全てを包含する真理や善に到達できないと思います。

ここで、もう一つ紹介したいのが、江戸時代の大阪の町人学者で思想家でもあった富永仲基の「加上」の考え方です。中基は、経典成立に関して、現在の大乗仏教は、それ以前の多くの研究者の説に後の世の人々が次々に新説を「加上」して出来上がっていると主張しています。つまり仏教は釈迦が一人で説いた思想ではなく、後世の仏陀の弟子たちがバトンの受け渡すように、前説に「加上」して順次発達させてもので、大乗教は釈迦仏滅後の人々の諸説の大成であると言っています。

皆さんがその研究活動においてそのことを心にとどめ、楽しみながら実用性に軸足を置き、またロジックを追及するピュアな心で物事の神秘性や美意識を感じながら、先人の考えに「加上」することで研究の成果を挙げられることを期待しています」。

文責 石田祐子